



漢方調剤を専門とする「高島堂薬局」

戸田 哲司さん

とだ・さとし

「高島堂薬局」は明治2（1869）年創業の漢方薬局だ。患者は北海道から沖縄まで、国内に限らず海外にもいる。5代目店主の戸田哲司さんは、一般的な調剤薬局勤務を経て16年前に高島堂薬局に入局。以降は東洋医学の考えに基づく漢方調剤の仕事に従事している。

症状だけでなく
全体から病気を診る

明治初期まで、薬といえば漢方を指した。しかし、西洋医学による医療制度が整うと、東洋医学は百年近く下火になった。その後、昭和40年代後半に一般用漢方製剤承認基準が定められ、漢方が見直されるようになったという歴史がある。

「東洋医学では『中庸』といって、すべてに偏りのない、バランスの

表面的な症状を治す「標治」、
病気の本質を治す「本治」。
治療を分けるのが東洋医学

す。葉っぱのほうの症状が強ければ、そこから治療を始めることもあります。枝葉の症状にとらわれず、大本を見て病気を治療します。目に見えている症状を治すことを「標治」、病気の本質を治すことを「本治」といい、治療を分けるのが東洋医学の特徴だ。

常にフラットな状態で
患者と向き合う

ひと昔前は身体の具合が悪ければ、まず薬局に行つて薬を買って飲み、それでも治らなければ医者にかかった。国民皆保険の施行後は、医者の処方箋を持って薬局に行く流れに変わり、ファーストチョイスが薬局でないことが多くなった。「初めに病



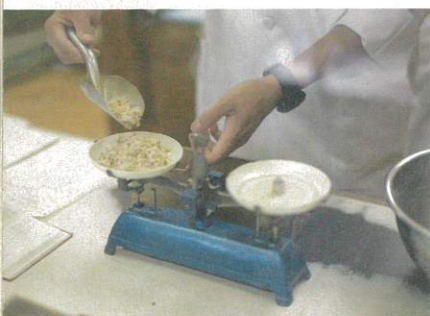
院に行くと、私どものような薬局にはなかなか入りづらいかもしれません。でも、気軽に相談いただければと思います」と戸田さん。

「ご自身の病気が治ると、次は知り合いを助けてあげてくださいというように、患者さんが患者さんを連れて来てくださる。病気が治ったときに『ありがとうございます』と言っていたが、とうとうおっしゃいます」と言っていた。だく回数は普通の薬局より多いかもしれません。そのひと言は嬉しいものではあるが、「患者さんが快

方に向かったときも、そうならなかったときも、一喜一憂しないように心がけています」と続ける。心身に波風を立てず、常にフラット、すなわち「中庸」の状態で患者を診ることが大切だからだ。

「昔の漢方医は『自分の心を鏡にして、自分の身体に病人の症状を映して診察しなさい』と言っていました。だからなるべく淡々と患者さんと向き合おうと思つています」

(さ)



高島堂薬局

文京区本郷 5-24-4
03-3811-1657
www.kanpo-takashimado.com
9時～19時
日曜、祝日、第1・第3土曜

